

# 地域活性化プロジェクト・実践報告

地理歴史科 宮崎 嵩啓

本稿の課題は、金沢大学附属高校の1年生（73回生）が今年度「総合的な探究の時間」に取り組んだ「地域活性化プロジェクト」を取り上げ、地域に軸足を置いた学校教育の可能性について考えることである。本稿では特に、本校が立地する平和町を舞台に、地域の課題解決に取り組んだ「平和町プロジェクト」に焦点をあて、プロジェクトがどのような理念で誕生し、どんな実践を積み重ねてきたか、明らかにする。

キーワード：総合的な探究の時間 フィールドワーク 地域活性化

## 1. はじめに

金沢大学附属高校では今年度、1年生の「総合的な探究の時間」（金曜午後に実施。以下、探究）において、「地域活性化プロジェクト」（以下、PJT）と題して、地域の課題解決学習に取り組んだ。生徒に与えられたミッションは「身近な地域やそこに暮らす人びとを幸せにする方法を提案・実践しよう」である。

学校教育において、地域を舞台にした実践は近年数多く積み重ねられてきている。中央教育審議会も、昨今の地域社会は「人口減少、高齢化、グローバル化、貧困、つながりの希薄化、社会的孤立、地方財政の悪化」といった変化や課題に直面しているとして、「持続可能な社会づくりを進めるために、住民自らが担い手として地域運営に主体的に関わっていくこと」<sup>1)</sup>を求めている。こうした中で、地域のなかで学校が果たす役割も大きくなりつつあるのではないだろうか。

そこで本稿では、本校1年生が今年度取り組んだPJTについて紹介し、地域に軸足を置いた学校教育の可能性について考えることを課題とする。

## 2. 発端

本章ではPJT企画の経緯を明らかにする。この

PJTは今年度本校において実践したものだが、その淵源は2年前に遡る。筆者が本校に着任した2017年は、文部科学省「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」（以下、「有識者会議」）が開催されていた。特に2017年は、この「有識者会議」が報告書を取りまとめる段階で、議論の進捗状況が定期的に報告される職員会議には、ややピリピリしたムードが広がっていた。なぜなら、「有識者会議」は少子高齢化と教員需要減少の時代にあって、「公私立とは異なる国立大学附属学校としての存在意義・役割・特色」<sup>2)</sup>を各学校が示すことを強く求めており、これを受けた金沢大学人間社会学域学校教育学類は附属学校園の再編を検討していたからである。

着任間もなく、筆者は学校存廃問題に直面することとなったのであるが、この経験はPJTの企画・運営にあたって、筆者に強く作用した。学校の再編には強い抵抗感を覚えたが、学校の存続が目的ではない。一教員として、自らの実践が目の前の生徒にとってどんな意味があるのか、目的は何なのか、どのように学んでいくのか等々の問い合わせが筆者の中に芽生えたのは、この時だったよう思う。

本校着任2年目の2018年、筆者は翌2019年度の1年生「総合的な探究の時間」の主担当となることが

決まった。本校では長らく、1年生の「総合的な学習の時間」に、石川県内をフィールドに課題解決策を提言する活動を行ってきた。高校生の柔軟な発想はイノベーションの源で、これまでにも自治体や企業がアイディアを採用した事例は少なくない<sup>3)</sup>。近年は、積極的に社会に発信する場を創ろうと、財務省北陸財務局主催「北陸地域連携プラットフォーム」での生徒発表（2016年度）や日本政策金融公庫主催「高校生ビジネスプラン・グランプリ」への応募（2017年度）、そして本校主催「企業向けポスター・セッション」の開催（2018年度）など、社会に「評価してもらう場」がいくつも生まれている。

しかし、社会を題材とする割には生徒の活動は校内完結型で、議論も「イメージ」にもとづいてなされる場合が少なくない。例えば、テーマ設定では、生徒はインターネット上に存在する無数の情報から、その地域の課題らしきもの（人口減少、少子高齢化など）を抽出して、それをほぼそのままテーマに設定してしまう場合もあった。生徒が対象地域とする石川県加賀市周辺や能登半島は学校から遠く、実際に足を運んで調査したり、提案を実践したりする機会を学校として保障しづらかったのが原因である。

筆者は2019年度の探究を担当するにあたり、従来の課題を克服しつつ、附属学校として新たな挑戦となるような実践を目指そうと考えた。そんな折、先輩教諭から、高校生がシャッター通りとなっていた商店街の再興を成し遂げたという話を聞いた。何気ない普段の会話であったが、「めっちゃおもしろい！」筆者は強く心を惹かれた。「1年生の探究も平和町大通り商店街でやったらしいのに」。その先生の返しに筆者は「これだ！」と思った。能登半島まで行かなくても、足元に課題はあるではないか。生徒の活動を提案で終わらせないためにも、実践の現場が必要であろう。「午後の時間帯に生徒を地域に放って、課題を見つけてきてもらう。そして、そ

の課題を、授業を通じて解決していくのはどうだろうか？」「次年度は『課題発見』の部分をもう少し大事にしたいな」。当時の先輩教諭との会話メモである。「平和町活性化プロジェクト」と仮称をつけたこのプログラムに、筆者はワクワクが止まらなかった。「ゆくゆくはこのプログラムを附属学校園全体のプログラムとして取り組めないだろうか。金沢大学附属学校園は幼・小・中・高・特支の全5校園で構成されているから、各発達段階に応じた一貫した教材として発展させていく可能性はないだろうか」。構想は膨らんでいった。

実際、平和町という地域の持つ可能性は魅力的だった。というのも、この地域は複数の学校が立地するほか金沢大学の教職員官舎などもあり、文教地区としての性格が強い。近隣の金沢泉丘高校・金沢二水高校とは合同課題研究発表会を企画・開催してきた経緯もあり<sup>4)</sup>、将来的にはこれらの学校を巻き込んでプラン対決をさせるなど、学校を超えて地域の人びとを巻き込んでいけたら、何かが起きるのではないかというワクワク感が筆者を突き動かした。

### 3. 年間計画

校内での審議を経て、PJTは正式に学校のプログラムとして2019年4月からスタートすることとなった。設定課題は「身近な地域やそこに暮らす人びとを幸せにする方法を提案・実践しよう」で、その際3つの要件を課した。1つは地域の課題を自分たちで発見するということ（課題発見）、2つは社会人を必ず巻き込むこと（協働）、そして3つは高校生らしい発想で解決策を提案・実践すること（独自）である。この課題設定に伴って、授業時間中の校外フィールドワーク（FW）も可能とした。設定課題の「身近な地域」については、探究の2時間（50分×2コマ）で往復可能なエリアと定めた。年間計画は次頁の通りである。

さて、PJTの実践にあたっては、事前の調整が重

要になってくる。1つはFW実施に伴う安全面の確保である。昨年、本校では教職員数に対して部活動数が過多である現状を踏まえ、特に運動部には1部活2顧問体制を確保するという趣旨のもと、部活動数の削減改革を決定した。緊急時の対応を考えれば、危機管理上やむを得ない措置と言えるが、そうした状況を踏まえたとき、FWの危機管理も自ずと問われてくることになる。一方で、生徒には実社会で自分たちの力で、大人と関係を築いてほしいという思いも筆者にはあった。実際、学年120名（全24チーム）を引率することは事実上不可能であり、結局筆者は次の3点を固めることで、この問題への答えとした。1つは高校生総合保険の案内である。全国の国立大学附属学校園で提供されている商品や、県内企業が提供する商品など、複数の選択肢を保護者宛に案内し、任意ではあるが加入の検討を促した。2つは各チームにFW計画書の事前提出を求めたことである。そして3つは、FW実施時の緊急連絡先の確保である。これは学校所有の携帯電話番号を生

徒に事前に周知し、当日不測の事態発生時や教員と相談したい場合などに活用された。

いま一つ、事前に調整を必要としたのが、このPJTにご協力いただく社会人の方々である。当然、課題は生徒が自ら設定すべきものであるから、PJTが動き出さないとどの社会人と連携するのかも見えてこない。ただし、今年度は実験的に本校が立地する平和町をフィールドに活動するチーム（以降、平和町PJT）を最低2～3チーム編成する方針でいたので、新年度開始以前から平和町との調整は可能であった。平和町との繋がりは、先述した先輩教諭と筆者が、時折平和町の飲食店に夕食を食べに行っていたことがきっかけである。学校の話題や商店街の話題でいつも盛り上がった。この飲食店のマスターこそ、今年度の平和町PJTを地域住民の側から強力に支えてくださった方なのである。何か一緒にできないだろうかとあれこれ考える中で、昨年度は平和町大掃除に高校生が協力したり、街のハロウィン・イベントを共催するなど、緩やかな連携が生まれつつあった。

ある日、平和町PJTの構想を持参した筆者はマスターから平和町大通り商店街の現状と課題について、お話を伺う機会を得た。「いま商店街でも、自分（註：マスター）たちが所属する青年部を中心に、街を活性化させようという動きが起き始めているんだ」。「ハロウィン・イベントを始めたのは5年前。地域の夏祭りにも青年部として出店するようになったんだ」。「そういえば今、金沢市商店街活性化事業に平和町大通り商店街として名乗りを挙げようと計画しているよ」。このやり取りは2018年12月中旬ごろだったと記憶するが、新年度もし附属高校と一緒にプロジェクトをやっていこうと思ったら、2月の理事会で諮るべきだとアドバイスをもらった。これほど前向きに考えてもらえるとは思わず、率直に筆者は感動した。と同時に地域住民の実感にも触れることとなった。「我々（マスター）からしたら、附

### 73回生 地域活性化プロジェクト！（総合的な探究の時間×国際教養基礎）

年間スケジュール（実習の可否あり）

月	日	5限	6限
4	12	オリエンテーション 平和町を探検しよう！	
	19	平和町探検・成果報告会（ラウンドテーブル）	
	26	国連会議をデザインしよう！（実習参加）	
5	10	国地域再生に関する講演（金沢大学・佐無田光先生）	
	17	プロジェクトチーム（PJT）立ち上げ！	
	24	国NASAゲーム・チーム力向上研修	
6	7	調査・実践日①（フィールドワーク=FW不可）、PJT会議	
	14	調査・実践日②（FW可）、PJT会議	
	21	調査・実践日③（FW可）、PJT会議	
	28	進捗状況整理会	
7	10	国フィールドワーク研修	
	17	現地学習計画立案	
	24	調査・実践日④（1・2限 FW可）、PJT会議	
8	26	調査・実践日⑤（現地学習1日目、FW必）	
	夏休	***PJT別活動期***	
	夏補	PJT会議（中間報告準備、FW不可）	
9	29	第2回中間報告会→メンテーナーは72回生！	
	6	調査・実践日⑥（FW可）、PJT会議	
	13	調査・実践日⑦（FW可）、PJT会議	
	20	国プレゼンテーションスキル研修	
10	27	企画・報告書&ポスター作成①	
	11	企画・報告書&ポスター作成②	
	1	報告会①（実習参加）	
11	15	報告会②	
	22	報告会③	
1	11	4校合同課題研究発表会（金大附属・金沢泉丘・金沢二水・金沢西）	
2	21	企業向けポスターセッション	

附属学校園は敷居が高いよ。中で何やってるのかさっぱりわからないし」。私は「例えば10月中旬には学校祭やりますよ！生徒が歌舞伎を上演したり、模擬店を出したりしますよ」と応答すると、「そうなの、まったく知らなかった」と返ってきた。これが附属高校と地域住民の現在の距離であり、関係なのだと思った。「これから少しづつ、時間かけていいし、起爆剤になろう」とマスターは仰ったが、まったくその通りだと思った。

#### 4. 導入

2019年4月、新1年生が入学してきた。筆者は幸運にもこの学年の担任を拝命し、より密接に生徒と関わりながらPJTを進めていく機会を得ることとなった。

4月12日、第1回目の授業、オリエンテーションである。ここで重視すべきは、やはり「やってみたい」「楽しそう」と思わせられるかである。2019年度から本校のカリキュラム・アドバイザーに就任した先輩教諭（前田健志先生）にも相談に乗ってもらった。授業は、本校を2018年度で退職した高橋栄一先生の地理歴史科（地理）の授業における実践事例「特定せよ！」<sup>5)</sup>に倣って、「特定せよ！ in 平和町」と題した。

右の写真は、いずれも本校の立地する平和町のいずれかの地点を撮影したものである。生徒をいくつかのチームに分け、それぞれのチームに数枚の写真を渡して、この写真が平和町のどの地点で撮影されたものかを特定する探検活動である。写真の中から手がかりとなる街の特徴を捉え、地図をもとに実際に歩きながら探っていく活動は、それ自体楽しそうである。写真Ⅰでは標識の矢印がかなり特殊な表記になっていて、鍵型の道路を見つけ出せるかがポイントである。一方、写真Ⅱは平和町が立地する寺町台地から見下ろした犀川とその周辺の街並みである。ある程度方角を絞ることができれば、「ゴミの



写真 I



写真 II

不法投棄」警告看板を目印に辿り着けた。ただし、この「特定せよ！」はあくまで生徒を平和町に放つためのきっかけで、本当の狙いは実地を歩くという経験、すなわちFW入門である。実際に街を歩いてみると発見がたくさんあるはず、そんな思いで生徒にはもう1つミッションを与えた。「特定せよ！」の途中、生徒は平和町界隈をぐるぐると歩くが、その際1人1枚、特に気になった箇所（「気になる」の中身は自由。惹かれた場所、ワクワクした場所、不快に感じた場所等々）の写真を撮影してくることを課題とした。すると、最初のFWを終えて帰ってきた生徒の写真は実に多種多様なものだった。

翌週の授業では、生徒には前回のFWで自身が撮影してきた写真を1枚ずつ持たせた。そしてその写



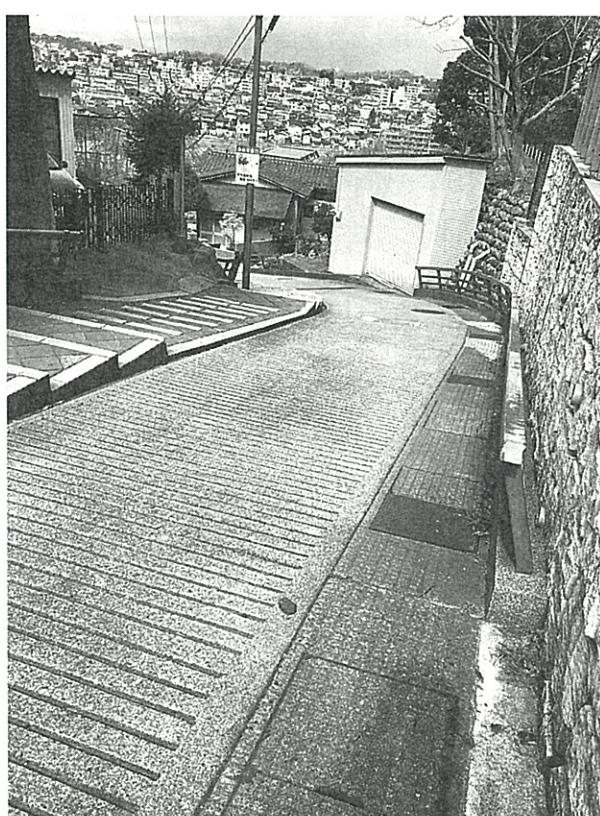
写真III



写真IV

真の裏に、自分はなぜこの場所を撮影したのか、そこで感じたものをそのまま言葉にしてもらった。記入後、再び写真を表にして、机上に置いてもらった。全生徒に付箋を配り、自分以外の写真を見て回り、「この人はどこに注目したんだろう?」「なぜこの写真を撮ったんだろう?」という問い合わせのもと、各々が付箋に「きっとここに注目したんだ!」という予想解答を書いて机の上に貼っていった。10分ほど経過して、生徒は再び自分の机に戻る。すると、予想外の解答がずらりと並んでいる。

例えば上記写真IIIの場合、撮影した生徒の「模範解答」は「自転車や車いすには不便だと思った」であった。これに対して寄せられた予想解答は「階段が緩やかで優しい」「地味にうれしい」といったポジティブな評価のほか、「違う世界に行けそう」など、想像を膨らませた生徒もいた。もう1枚、写真IVではどうか。「模範解答」は「『止まれ』が目立つようにしたんだ」とあったが、コメントでは「カラ



写真V

フルなまち」「めっちゃアート」「目の錯覚を利用しておもしろい」など、ユニークなアート作品に映った生徒もいたようだ。写真Vに至っては、「よい景色」という評価が大勢を占める一方、「手すりが錆びて壊れそう！危ない！」と課題を指摘する意見もあった。実におもしろい。同じ写真を見てもこんなに見方が違うのだ、多面的・多角的な視点とはまさにこのこと、私たちが120人で学ぶ意味はここにある、そう確信した瞬間だった。私たちは次に本格的なチーム編成に進んだ<sup>6)</sup>。

## 5. 平和町PJT

120名の生徒はそれぞれの関心に沿って、原則5人で1チーム（計24チーム）を組み、プロジェクトは動き始めた。それぞれのチームにそれぞれの物語があって紹介したいところだが、紙幅の関係上ここでは冒頭に紹介した平和町PJTについてのみ扱うこととした。平和町PJTは4チーム（計20名）の生徒で構成された合同チームである。本校は1学年3クラス展開で、A組・C組から1チームずつ、B組から2チームが、この平和町PJTに名乗りを挙げて、合同チームとなった。20人という組織的優位を活かして年間を通じ街に対して様々な仕掛けを施していくこととなる。

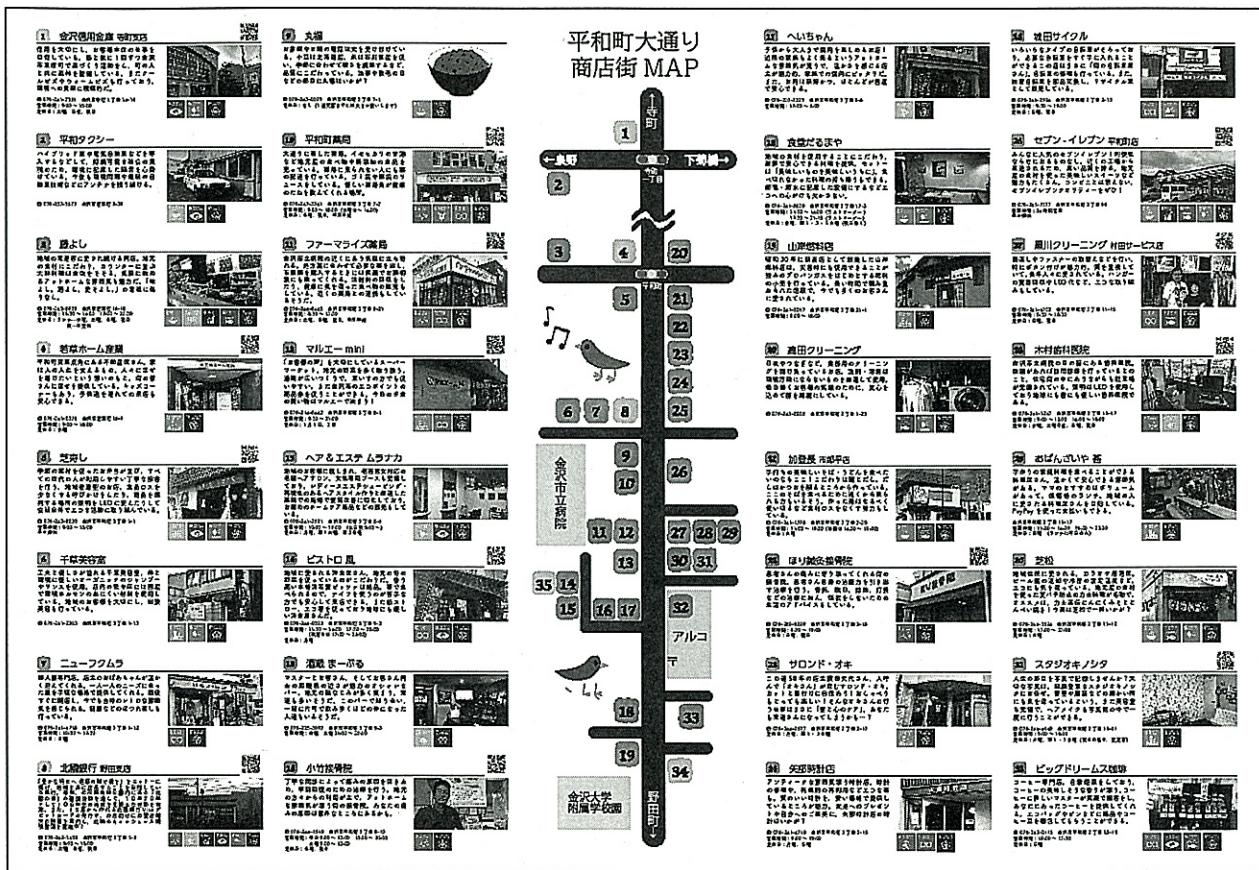
### (1) 平和町大通り商店街エコショップ・マップ

まず最初に取り組んだのが、「エコショップ・マップ」の制作である。これは金沢市環境政策課が取り組む「グリーンコンシューマー育成事業」の一環で、市内の商店街を「エコ」の観点から捉えなおしたマップを作成して、環境にやさしい買い物の促進・啓発をはかる事業である<sup>7)</sup>。これまでにも金沢市の石引商店街や伏見台商店街で取り組まれ、金沢美術工芸大学の学生などがデザインを手掛けたマップが実際に街中で配られている。これに対して、今回の平和町大通り商店街では、初めて高校生が取材

から制作まで一手に請け負うこととなった。

完成したマップは次頁のようなものである。A3版ほどの用紙に、片面に8面（両面合わせて16面）の記事構成になっていて、一面には商店街マップと個々の店舗の紹介、もう一面には平和町や本校の紹介、制作の趣旨などを記した。6月上旬に取り組みが始まり、取材・校正を経て11月初旬の刊行となった<sup>8)</sup>。制作にあたっては、言うまでもないが、平和町大通り商店街の皆さんに多大な協力をいただいた。また、今回は全35の店舗にご協力いただいたが、平和町との密な折衝は、先述の前田先生に全面的な協力をいただいた。前田先生には今年度、筆者の探究の授業を陰ひなたに支えてもらったが、その1つの形として、校内的な調整は筆者が担い、街側との調整を前田先生にお願いするという「分担」である。筆者と前田先生は定期的に連絡を取ることで、双方が状況を共有し、必要な対策を講じることができた。一般的に、学校外の方々と連携しようと思えば、教員がそのコーディネートを努めなければならないケースが多い。しかし今回のケースでは、前田先生に平和町と学校を繋ぐパイプ役を果たしていただいたことで、平和町PJTは円滑に進み、それでいて教員の負担はほとんど増えなかった。

ところで、このエコショップ・マップの制作を通じて、生徒はもちろん我々教員が学んだことは数多い。その中でも、特に筆者の価値観を揺さぶったのが、金沢市に本社を置く、自動車リサイクルと中古車及び中古車部品の輸出販売を手掛ける「会宝産業」<sup>9)</sup>の訪問・見学を通してであった。同社は循環型社会の実現を大きなテーマに掲げて、廃棄自動車から資源となる部品を丁寧に回収し、リサイクルに回したり、リユース品として海外に販売したりしている。SDGs12に「つくる責任 つかう責任」とあるが、会宝産業の方々はこれに加え「あとしまつの責任」を強調する。日本が得意とするものづくり産業が「動脈産業」なら、会宝産業は「静脈産業」。そ



**マップの見方**

- 飲食・食品
- サービス
- 小売
- 医療
- その他

**アクセス Access**

**エコショッフマップ。**

**平和町について**

今では平和町と呼びやうこの町にはかつて、旧日本軍第五師団の原宿が分かれています。第五師団は日清戦争後、対露戦争に参入して設置されたもので、当時は日本の新しい音楽文化が満ち、音和町はかけられた軍事的町だったのです。

第二次世界大戦が終結した後、「音川」などから名を取れて来た兵士たちや学生がここに移り住みました。それと一緒に音和町の街並地などとして市場が誕生しました。

兵士は武器を手放し、人々は兵舎を開放しました。若者が平和を願うようになったのです。こうして、この「平和町」が誕生したとされています。

今から40年近く前に始めたこの町では高齢者の方々多くがけます。一方で外国人や転勤でごろごろに新しく来る人は増加しています。しかし、大きくなり化すこの平和町について、知っている人はそれなりいるのです。

「多くの人に平和町に同心を抱いてほしい!」「この町にモット音活気を!」私たちは、そんな思いを胸に今回のエコショッフマップを作成に乗り出しました。

**ランダ BOX**

**アル販不動産**

**森い学校 教員コンサルタント Second**

企画・運営: 合同会社ひるいい実業連携協会  
取扱: 合同会社ひるい  
協力: 平和町大通り商店街組合  
お問い合わせ: 合同会社ひるい (070-2222-2222)

穴開: 幸和光年ノ月

**趣旨**

このエコショッフマップは、平和町大通り商店街にあるエコなポイント（お店など）の紹介や、「SDGs持続可能な開発目標」の認定も交え地図に示したもので、未来の地球のために行っているエコな活動を取り上げる「活動紹介」の側面と、時代の変化に伴い商店街を、さらに皆様に知りたいこつ、盛り上げようという「活性化」の創意を掛け合わせた組み立てです。

平和町大通り商店街が活躍をはじめてから50年になります。この節目の年に、平和町大通り商店街に興味を持って、足を運んでいただきたいと思います。

**金沢大学附属高等学校について**

このエコショッフマップは、丸山高志先生を目的に、金沢大学附属高等学校の73回生が「総合的な探究の時間」に制作したものです。附属高生が各学年担当の教員、デザイン等を一貫して担当し、全沢市及び平和町大通り商店街からの協力をいただき、完成しました。

金沢大学附属高等学校は昭和22年2月、学校日記は「地図サイズの校舎」、校訓は「自主自律」であり、正式な学校名である「金沢大学人間社会学部附属高等学校附属高等学校」は日本一の役を果たしています。

令和元年度よりイノベーティブなグローバル人材育成のためのプログラムである ViViVi（ワールドワイド ラーニング）コンソーシアム協賛支援事業（3年間）に指定されています。

**GOALS**

SDGs	持続可能な開発目標
1. 終結する貧困	2. 健康と福祉
3. 気候変動に適応	4. 水資源の持続可能利用
5. 経済成長と社会的不平等の削減	6. 食料・農業・食糧安全
7. 持続可能なエネルギー供給	8. 清潔な水と衛生
9. 経済成長と社会的不平等の削減	10. 経済成長と社会的不平等の削減
11. 経済成長と社会的不平等の削減	12. 経済成長と社会的不平等の削減
13. 経済成長と社会的不平等の削減	14. 経済成長と社会的不平等の削減
15. 経済成長と社会的不平等の削減	16. 経済成長と社会的不平等の削減
17. 経済成長と社会的不平等の削減	18. 経済成長と社会的不平等の削減

持続可能な開発目標（SDGs）とは、2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDG）の継続として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない（leave no one behind）ことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）なのであります。日本としても積極的に取り組んでいます。

高齢者 グループホーム 愛護  
障がい者 グループホーム 愛護

平和町の団地の入り口には二つのグループホームがあり、「グループホーム愛護」では、高齢者や障がい者に認知症の高齢者の方々が、 「グループホーム愛護」には障がい者の方々が暮らしている。

両ホームでは、平和町とのつながりを深めるため、平和町の活動などに積極的に参画しており、開放的で外から中へ、中から外への動きが行きやすいよう、活動を続けています。実際に、愛護では月辺に住む子供が遊びに来たり、愛護の方々は平和町の人々と協力してイベントを開催している。是非平和町に来て、愛護・愛和の活動を見て、知り合い。

れでも静脈がしっかりとしていないと、循環型社会は成り立たないというのである。なるほど、確かに私たちは新車のCMはよく見るが、作られる分だけ廃車も存在しているはずである。しかし、車の後始末にはなかなか目が向かないのではないか。エコショップ・マップを制作していた筆者らは、「エコって、一体何なんだ」と鋭く考えさせられた。

会宝産業では、廃車に僅かに残るエンジンオイルやガソリン（年間10万リットルに達するそう）を回収して、温風機付き温室ハウスでトマトを栽培するほど、徹底してエコを実践している。筆者は会宝産業見学後、自らの捨てたモノがどこへゆくのか、つい考えてしまう。価値観が揺さぶられたのだ。いま生徒が取り組んでいるエコショップ・マップも、その制作を通じて生徒に何を考えてもらえるかが勝負であると思った。

## (2) 夏祭り、ハロウィン・イベントと平和町会議

平和町PJTでは今年度、平和町で開催される夏祭りおよびハロウィン・イベントを共催させていただいた。ここでは、夏祭りやハロウィン・イベントの準備過程で実施した「平和町会議」について簡単に触れておきたい。

この会議は附属高校生と平和町の方々が、街に存在する現実の課題を共有し、解決していくための定期的な意見交換の場として、今年度初めて設定したものである<sup>10)</sup>。イベントなどの際には協働で企画を練ったり、街の責任者と折衝したりする場として、今年度は計4回<sup>11)</sup>開催された。各回のテーマは、「地域の課題を洗い出そう！（第1回）」「夏祭りの成果と課題（第2回）」「ハロウィン・イベントの成果と課題（第3回）」「新イベントの企画・調整（第4回）」である。会議を通じ、生徒と街の方がイメージを共有し、躊躇している問題を協議して解決することができるため、平和町PJTにとって大きな推進力となってきた。



平和町会議の様子

## (3) 平和町春祭りの企画

探究の年間テーマは「地域活性化」である。年度末も迫り、成果発表会の機会が増えてくると、各チームは年間の活動を貫く理論やストーリーは何だったのかという問い合わせに突き当たる。平和町PJTにおいても、個々のイベントは成功を収めても、全体として「活性化」をどう考えるのかという視点の弱さに気づく。また、活動の継承のあり方も問われてくる。学校としては単年、もしくは生徒が入学から卒業するまでの3年1セットでカリキュラムを捉えがちだが、地域住民の側からすれば相手はいつも附属高校なのである。我々の事情だけで、簡単に手を退いてしまえば、街との共存はあり得ない。こうしたことを踏まえ、平和町PJTでは新年度4月上旬に、本校の新1年生も含め平和町に新たにやってきた人を対象に、親睦を深め、街の活性化の契機とするために新イベントを企画することにした。企画は現在検討中だが、高校生が街の魅力を紹介する体験型の「街ゼミ」や、イベント参加者全員でつくる巨大アート、そして飲食ブースの展開などを考えている。生徒は商店街に加盟する店舗に1件ずつ取材に行き、記事をまとめたり、体験ブースの詳細調整を行ったりしている。新1年生を中心に、イベントの楽しさを経験してもらい、後継者を募ろうというものだ。4月の開催に向け、現在楽しく準備中である。

## 6. おわりに

1年間のPJTの成果と課題について簡単にまとめできたい。本稿で紹介した平和町PJTの他にも、豊町ストリートを舞台に全国で初めて高校生が企画・運営する「かなざわ未来芸術祭」(2021年春実施予定) チームや、防災情報や生活役立ち情報の配信を一本化した訪日外国人向けアプリ「BATON」開発チームなどが現在進行形である。こうした実践が可能となった理由を、昨年度までの本校総合的な学習の時間と比較してみると、大きく2つの差異が指摘できる。

1つは足元の地域を対象に、FWを伴うプログラムに変更したことである。従来の加賀南部や能登地方をフィールドにしていた時期には実現が困難だった「現地に足を運ぶ」ということが、今回初めて可能になった。住民と対話し、現場と対話し、チームと対話する。こうした過程のなかで、生徒は実社会と関わることの楽しさや難しさ、すなわち、本物の体験をしていくのである。この本物の体験こそ、学校を飛び出し、地域で学ぶことの最大の魅力である。

2つ目は今回、前田先生に担当していただいた外部との調整についてである。本稿では平和町PJTの場合、筆者が校内=生徒とコミュニケーションを取り、前田先生が外部=平和町大通り商店街のそれを担当するという分担があったと紹介した。前田先生と筆者は定期的に情報交換・調整をしてきたが、特に前田先生には商店街振興組合の青年部会や理事会に度々出席いただいた。既存の地域のイベントに参入するだけでなく、商店街を巻き込んだ新たなイベントを企画するとなると、聞こえはいいが、地域の合意調達は容易なことではない。平和町PJTの成果をこうして報告できるのも、背景に前田先生が粘り強く地域と対話してくださったからで、おかげで筆者は教員としての平時の業務もこなしながら、PJTに取り組むことができたのである。学校教育が社会と繋がる実践を必要としていることに異論はなかろ

う。しかし、いざ社会と繋がってPJTを動かしていくという場合に、これをすべて教員で回していくというのは限界があるようだ。これはあくまで私見だが、学校と社会を繋ぐポジションの人物の存在は、こうした活動の成否に大きくかかわってくるようだ。

一方で、1年間を振り返ると、まだまだ発展途上の部分も多い。例えば課題発見とテーマ設定についてはなお改善の余地ありである。現場から課題を見つけてくるという方針のもと、年度初めから積極的にFWを促してきたが、現場に行くことが適切な課題設定を可能にするとは限らない。今回ほとんど触れられなかったが、今年度も北陸財務局や日本政策金融公庫、金沢青年会議所など、外部機関の方々には発表会の審査員やアドバイザーなど、多大な協力をいただいた。しかし、今にして思えば課題発見や課題設定の時期にこそ、外部の方に入ってもらって、テーマの妥当性についてもっと指摘をもらえばよかったですとも思う。この点については次年度に引き継ぎたい。

学校としての体制づくりという点でも課題は残った。校内の先生方や生徒に、筆者がいま抱いているワクワク感を十分に共有できなかつたことは、筆者の反省点である。ワクワクの拡散がなければ、どんなPJTも持続・発展してゆかない。平和町PJTも含め、次年度継続実施のPJTもいくつかある。地域の方々にご協力いただいていることも踏まえれば、現1年生の後継者育成は待ったなしである。次年度が正念場ということを筆者も肝に銘じたい。

ここまでほとんど筆者を主語に書いてしまった。肝心の生徒がほとんど出てこなかつたのは筆者の力不足である。最後に今年度の探究を支えていただいた先生方と外部機関の方々、そして生徒のみなさんに心からの謝意を表したい。こうした方々の尽力がなければ、筆者は到底PJTを成し得なかつた。ここに改めて御礼を申し上げて、筆を置く。

注：

- 1) 中央教育審議会「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）概要」2018年12月。
- 2) 国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて－国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書－概要」（2017年8月29日）。
- 3) 例えば、「加賀地域観光巡りツアーを企画して、金沢の観光客を石川県全体のリピーターにしよう！～マダムを虜にする加賀～」（金沢大学附属高校『地域課題研究』2016年12月）や、「川北“愛”検定～川北町と子供のつながりを深め若者増加の社会を持続的なものに～」（同『地域課題研究』2018年2月）など。
- 4) 正式には「3校合同課題研究発表会」。2017年度に、当時本校教員だった前田健志教諭が、金沢泉丘高校の石尾和彦教諭と創設した発表会。のちに、金沢二水高校の大島崇教諭を巻き込んで3校共同開催の発表会となった。
- 5) 高橋栄一「『主体的・対話的で深い学び』を目指す授業改善—新学習指導要領の実施に向けて」（金沢大学附属高校『高校教育研究』第70号、2018年3月）。
- 6) 導入はこのほかにも、金沢大学人間社会研究域経済学経営学系教授・佐無田光先生に出張講義をお願いした。演題は「地域再生の課題と地域研究の方法」で、なぜ地域を対象とするのか（視点の有効性）や、具体的研究方法について講演いただいたほか、奥能登芸術祭などを題材に地域資源に「意味づけ」を与えることなどを学んだ。平和町探検が実践的な導入だとすれば、佐無田先生の講義は理論面の導入として、重要な意味をもった。
- 7) 例えば、  
[https://www4.city.kanazawa.lg.jp/25001/seisaku/ondanka\\_boushi/katei\\_co2taisaku-suishinntenn-syoukai.html](https://www4.city.kanazawa.lg.jp/25001/seisaku/ondanka_boushi/katei_co2taisaku-suishinntenn-syoukai.html)など。
- 8) 「商店街のSDGs 手作りマップで紹介」（『北國新聞』2019年11月6日朝刊）  
<https://www.hokkoku.co.jp/subpage/H20191106102.htm>
- 9) <https://kaihosangyo.jp/>
- 10) 前田健志「『平和町プロジェクト』始動！」（金沢市商店街連盟青年部『COMぶろむなあ～ど商店街新聞』PART108、2019年7月）。
- 11) 2019年6月17日、8月5日、11月11日、2020年2月3日。